



科学系博物館の幼児向け展示室における子育て支援の可能性に関する考察：国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」を事例に

高橋, あおい

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 19(1):19-28

(Issue Date)

2025-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100497706>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100497706>



科学系博物館の幼児向け展示室における子育て支援の可能性に関する考察 ～国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」を事例に～

Possibilities for Childcare Support in Science Museums: A Case of the Exploration Area for Families with Children “ComPaSS” at the National Museum of Nature and Science

高橋 あおい*

Aoi TAKAHASHI*

要約：博物館は地域社会の生涯学習・社会教育の中核拠点としてその役割を果たしてきたが、近年、その役割は多様化しており、子育て支援の場としての機能にも注目が集まっている。各地の科学系博物館では、幼児とその保護者を対象とした様々な活動や展示が行われてきたが、展示室そのものが子育て支援の場として果たす役割を主たる関心とした研究はほとんどない。そこで本研究では、国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の運営スタッフへの面接調査をもとに、幼児向け展示室が果たしうる子育て支援の機能を、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援」という観点から考察した。その結果、安心・安全な遊び場の提供に加え、科学教育の独自性を生かしながら、保護者の成長を支援する場としても機能していることが示唆された。また、科学への関心が低い層にも開かれ、従来届きにくかった層への新たなアプローチが可能になった点も重要である。

キーワード：科学系博物館、親と子のたんけんひろばコンパス、子育て支援

1. はじめに

博物館は、地域社会の生涯学習・社会教育の中核拠点としてその役割を果たしてきたが、近年、求められる役割が多様化してきている。2022年4月の博物館法の改正では、「地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むこと」が努力義務として明記された（文化庁, 2023）。2022年にICOM（International Council of Museums）が採択した博物館の新定義では、博物館の基本的機能に加えて、“Open to the public, accessible and inclusive, museums foster diversity and sustainability”という定義が加えられた。ICOMの新定義について、小川（2023）は、「変化する社会の中で『博物館はどうあるべきか』という社会に働きかける動的な博物館の在り方へとその基調を変えてきた」と指摘している。

博物館の役割が多様化するなかで、子育て支援と

いう切り口からその可能性を捉え直すことは、今後の博物館の在り方を再考する上で重要な観点の1つといえる。少子化や核家族化などの影響により家庭の教育力が低下する中で、地域社会全体で子育てや学習を支援することが求められるようになり、地域社会の生涯学習・社会教育の中核拠点である博物館も、家庭の教育を支援することが期待されている（文部科学省, 2008）。専門的な知識や体験型展示を通じて子どもの興味を引き出し、地域に開かれた公共施設として多様な家族が気軽に訪れることができる博物館は、近年、子どもが安心して過ごせる空間としての期待も高まっている（こども家庭庁, 2023）。本研究では、このような博物館の可能性に注目し、科学系博物館を対象に考察を行う。

子育て支援は多様で複雑な概念である。大豆生田（2008）は「何が子育て支援かということ自体が自明なことではない」とした上で、子育て支援とは何

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究員
篠山チルドレンズミュージアム特任研究員
特定非営利活動法人里地里山問題研究所特任研究員

（2025年4月5日 受付）
（2025年8月18日 受理）

かと問い続けることが重要であると述べた後に、子育て支援の多様な事例を示している。萩原(2008)は、子育て支援を「狭義」と「広義」に整理し、狭義では子育て支援センターやつどいの広場など、制度的・機能的な支援が中心であるのに対し、広義では社会全体が子育てを支える営みとして、企業・NPO・地域・世代間など多様な主体による取り組みを含むと述べている。

このような子育て支援の多様な捉え方は、近年の制度や政策の方向性にも表れている。2012年に制定された子ども・子育て支援法では、保育所の整備や子育て給付、一時預かり事業など、育児の負担軽減に焦点を当てた狭義の子育て支援が規定された。一方で、2022年のこども基本法や2023年にこども家庭庁が策定した「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（以下、はじめの100か月の育ちビジョン）」（こども家庭庁、2023）では、子どもの安心や育ち、保護者の成長等を社会全体で支える点が強調され、子育て支援の捉え方が拡張している。

はじめの100か月の育ちビジョンは、「こどもの誕生前から幼児期まで」を人の生涯にわたるウェルビーイングの基盤と位置づけ、子どもの育ちを支える社会の役割を「保護者・養育者」「こどもと直接接する人」「こどもが過ごす空間」「地域の空間」「施策や文化」の5層に整理している。この中で「こどもが過ごす空間」には、保育施設に加えて、公園、図書館、科学館、自然環境、デジタル空間など多様な場が含まれ、科学系博物館もその一部とみなすことができる。また、同ビジョンは、保護者のウェルビーイングと成長への支援も重視しており、子どもが豊かに遊び・体験しながら成長できる環境と、保護者が安心して子育てに関われる社会の実現が目指されている。

実際の実践においても、子育て支援の場はその特性に応じた多様な機能を果たしている。保育施設や子育て支援センターでは、育児相談や一時預かり、親同士の交流機会の提供など、保護者の不安軽減や社会的つながりの形成に資する支援が行われてきた。一方、はじめの100か月の育ちビジョンで示された「安心と挑戦の循環」という視点から見れば、たとえば科学系博物館において、親子が共に展示を探索し、発見に挑戦する体験は、安心できる環境の中で子どもが主体的に育つ機会を提供するものであり、広義の子育て支援の一形態として捉えることができる。

博物館が社会教育施設として位置づけられていることを踏まえれば、科学系博物館や科学館が幼児向け展示室を設置する際の主たる目的は教育普及にあると考えられる（小川、2018；古川、2018；三村、

2018）。教育普及を目的とする一方で、三村（2018）は、福岡市博物館の幼児向け展示空間「おやこひろば」の現状と今後の可能性を紹介するなかで、この空間が副次的に「居場所」として機能し、多様な育ちを支える場となりうる可能性にも言及している。

各地の科学系博物館や科学館においては、これまでも、幼児とその保護者を対象とした様々な活動や展示が行われてきた。例えば、高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）では未就学児とその保護者を対象とした「おはなし会」が開催されている（五月女、2018）。この活動について、五月女（2018）は、おはなし会では参加者は親子でふれあいながらそれぞれの時間を過ごしており、おはなし会が博物館の特別なイベントとしてではなく、「日常の子育ての中で立ち寄ることのできる場所として認識されているように思う」と述べている。また、おはなし会が、子どもだけでなく、保護者自身が身の回りの自然や生き物に興味を持ったり子どもと一緒に学んだりする機会になっていると評価している。静岡科学館る・く・るでは、幼い子どもとその保護者向けの体験型科学教育プログラム「めばえのかかく」が開催されており、坂田（2018）は、子どもが楽しんでいる様子を見ることや保護者自身も一緒に活動に参加することが、保護者の満足度を高めると指摘している。大阪市立科学館では、2018年に幼児のための企画展「にじのせかい」を開催した。岳川（2018）は、途中集計ではあるが、「にじのせかい」に訪れた幼児のうち、大阪市立科学館を初めて訪れた幼児が60%を超えたと報告しており、当該企画展が幼児とその保護者に科学館を知ってもらうきっかけになっていたことが伺える。これらの先行研究では、科学系博物館における幼児とその保護者向けの活動や展示の教育的側面の評価に加えて、五月女（2018）のように、一部、子育て支援の側面からの考察も見られる。

しかしながら、これらの先行研究は、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の場として具体的にどのような役割を果たすことができるのかについて主たる関心を置いたものではなかった。そこで本研究では、国立科学博物館の幼児向け展示室コンパスを事例に、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の視点から展示室がどのような役割を果たし得るのか、それが子育て世代と博物館の双方にもたらす可能性について考察することを目的とする。

具体的には、コンパスの運営に携わった博物館職員（以下、運営スタッフ）に面接調査を行い、調査結果に基づいて運営スタッフが捉えた来館者の姿を詳述する。その上で、こども家庭庁の策定したはじめの100か月の育ちビジョン（こども家庭庁、

2023)を参照しながら、科学系博物館の幼児向け展示室が、広義の子育て支援の場としてどのような意義を持ちうるのかについて検討する。なお、コンパスを事例として選定した理由は、全国に先駆けて開発された科学系博物館の幼児向けの展示室であり、また、年間10万人以上が訪れる子どもと保護者に支持される展示室であるためである(小川, 2018)。

(1) 親と子のたんけんひろばコンパス

国立科学博物館の展示室「コンパス」は、2015年の国立科学博物館地球館I期展示改修において新設された展示室である。利用できるのは、0歳から小学生までの子どもとその保護者であり、4歳から6歳の子どもが主な対象である(国立科学博物館, n.d.)。また、入室は完全入替制で、必ず子どもと保護者が一緒に入室するきまりとなっている。

コンパスは、未就学児の科学リテラシー「感じる」と「考える」の涵養、博物館体験の持ち帰り、博物館での親子のコミュニケーションという3つの理念に基づいて開発された(高橋・山口・稲垣, 2021)。コンパスには、すべり台や吊り橋といった遊具と大型剥製標本とを組み合わせた3階建の構造物であるカハクのマド、昆虫や植物等を樹脂封入した標本を観察することができるみるみるテーブル、生き物や自然科学に関する絵本や図鑑を読むことができるライブラリ、職員がワークショップをしたりその他の時間に備え付けのワークシートを親子で楽しんだりすることのできるワークショップスペースといった展示エリアがある(小川, 2018)。

2. 方法

本研究で用いるデータは、2020年度に実施された別の研究(高橋, 2023)において実施された面接調査の一部である。当該調査はもともと、コンパスの理念と運営の関係を明らかにすることを主たる目的として実施されたものであった。本研究では、この調査の中から、子育て支援との関連が見出せる発言を抽出し分析を行った。

(1) 調査対象および調査方法

面接調査の対象は、コンパスの運営に携わったことのある国立科学博物館の職員または非常勤職員4名(A氏、B氏、C氏、D氏)であった。国立科学博物館に面接調査を申し込んだところ、面接当時はコンパスの運営から離れていたが、過去に3年間運営に携わっておりコンパスの運営について詳しく知る人物としてA氏を、面接当時、コンパスの運営に携わっており、現状について詳しく知る人物としてB氏、C氏、D氏を紹介された。面接の手法は半構造化面接法を用いた個別面接であり、面接者は著者であった。実施時期は2020年9月～10月、所

要時間は1人につき約45～80分であった。面接時の調査対象者の回答を円滑にするために、事前に質問事項を電子メールで送付した。面接はオンライン会議システムを用いて行われ、調査対象者の回答はオンライン会議システムに録音された。面接調査の実施にあたっては、調査対象者の同意を得ている。

面接調査は、コンパスの理念と展示・運営の関係を明らかにするために設計された。A氏への質問事項は、(1)コンパスの運営に携わっていた時期と立場について、(2)コンパスを運営する際にどの程度、理念を意識していたのかについて、(3)コンパスの展示が理念を具現化していると感じたのかどうかについて、(4)運営スタッフとして理念を具現化するために取り組んだことについて、(5)理念を具現化するために特に重要な展示はどれだと思うのかについて、の5つのカテゴリに基づいて設定された。B氏、C氏、D氏との面接は時間に制限があったため、質問事項は、A氏への質問事項をもとに簡略化して設定された。B氏はコンパスの開発にも携わっていたため、B氏に対する質問事項には開発に関するものと運営に関するものが含まれていた。本論文では運営に関する回答のみを分析の対象とした。

(2) 分析方法と限界

本研究の分析データは、面接調査で得られた口頭による回答の録音の書き起こしであった。分析にあたっては、全体の文脈に則して発言の意味を捉えつつ、「保護者と子どもとの関わり方」や「保護者が感じた子どもの成長」に関連する記述を中心に抽出、整理した。第3章では、保護者と子どもとの関わり方に注目して、A氏、B氏、C氏、D氏のそれぞれが捉えた来館者の姿を詳述する。第4章では、「はじめの100か月の育ちビジョン」や先行研究を参照しながら、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の場としてどのような役割を果たすことができるのかについて、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする」という観点から考察する。

なお、本調査の目的はコンパスの理念と運営の関係を明らかにすることであったが、コンパスは未就学児とその保護者を主な対象とし、理念に博物館での親子のコミュニケーションの促進が含まれるため、子育て支援の側面も副次的な観点としてごく一部調査目的に含まれている。面接時間には制限があり、調査項目には子育て支援を直接的に問う内容は含まれていなかった。このため、子育て支援に関する記述は限られており、網羅性には限界があるものの、現場における具体的な実践の記述に着目することで、子育て支援に関する新たな示唆を得ることを目的としている。

3. 運営スタッフが捉えた来館者の姿

第3章では、保護者と子どもとの関わり方に注目して、A氏、B氏、C氏、D氏のそれぞれが捉えた来館者の姿を詳述する。

(1) A氏の回答

A氏は、コンパスでの保護者の子どもとの関わり方は大きく3つのケースに分けることができると、以下のように述べた。1つめは保護者が子どもに積極的に関わり親子で一緒にコンパスを楽しんでいるケース（下記下線部(a)）、2つめは保護者が子どもから少し離れたところで安全管理のために子どもを見守っており、親子で一緒にコンパスを楽しんではないケース（下記下線部(b)）、3つめは保護者が自分自身のことに夢中で子どもを見ていないケース（下記下線部(c)）であった。

(a) 1つが親子で色んなことを一緒に体験をしてやっていくグループ、(b) もう1つが親は安全管理をよく見ている、はたからというかちょっと距離を離れてよく見ている、(中略) 最低限のことをしっかりやって、後は子どもさんは自由に遊ばせておこうというのが2つめ、(c) もう1つがですね、あのちょっと困ったなあというところで、もうずっと隅でスマホゲームしてるとか、はい行ってらっしゃいって言って、お母さん友だち集まっちゃってずっとママ友としゃべってて、お子さんこっちで泣いてるのに何もしないとか。後は居眠りしちゃうとか。

A氏は、以下のように回答し、保護者の子どもとの関わり方を変えるために、入室前のアナウンスを改善した（下記下線部(a)）と述べた。具体的には、入室前の注意事項を説明する際に、コンパスが親子のコミュニケーションを促す場であること（下記下線部(b)）、コンパスの全ての展示は保護者も利用できること（下記下線部(c)）を伝えるようにしたと説明した。

(a) 2年目くらいの時からですね、入室前のアナウンスを改善しました。そこは現場スタッフの方が入室前の注意事項みたいのを話す場があるんですけども、その時にですね、ここは(b) 親子でコミュニケーションをとっていただく場ですと。(c) 中にあるものは親御さんもちろんですし、お子さんもどれも触っていただけます。なので、一緒に体験をしてみてくださいみたいなことを言っていたら、入室をしてもらうようにしてもらいました。

(2) B氏の回答

B氏は、運営が始まってから、開発当時には想定外だったことの1つとして、ブログなどを通じて、英語教室の帰りに子ども同士を遊ばせる場として、コンパスを利用している保護者がいると知ったと回答した（下記下線部(a)）。B氏は、これまでの国立科学博物館では見られなかった利用のされ方であり、新鮮に感じたとして述べた（下記下線部(b)）。

想定外だったってことは、色々あるんですけど。(中略) (a) よくブログとかで、プレイデートをコンパスでやりましたっていう風に書いている方がいて、子ども同士をコンパスで遊ばせたっていうだけなんですけど、それをたぶんなんか、英語で言うことによってちょっとよくわからないんですけど、英語教室の帰りにプレイデートをさせるとか、英語を話す場としてコンパスを利用しているとか、なんでしょう、なんかそういうことがあるんだなって。(b) そういう使い方っていうのは結構、新鮮でした。今までの科博だったら、そういうことがあったのか、どうなのかなっていう感じ。

B氏は、グループで遊びに来た親子連れにおいて、保護者等同士が話に夢中で、子どもとコミュニケーションできていない場合があったとして述べた（下記下線部(a)）。

(a) お母さん同士でちょっと、お話が盛り上がってしまっ。こっちが、あまりその、こちらが意図した親子のコミュニケーションが取れていないというのもあるって。それはなんかどこまでこちらでお声かけするかというのは、運営の中でもなかなか難しいところがあるのかなという風に感じました。

B氏は、全体を通じて何かコメントがあるかという質問に対し、何度も来館する子どもがいて（下記下線部(a)）、来るたびに遊び方が変わる（下記下線部(b)）、一緒に来る人によって遊び方が変わる（下記下線部(c)）と感じると回答した。

(a) 結構、継続して何回か来てくださるお子さんもいるので、1回きりの利用ではなくて、(b) 来るごとにやることが変わって、色々な遊び方をされているんだなってことだったり、あとは誰と来るかによっても、1人でお母さんとだけ来るとか、友だちと来るとか、そういう、(c) 誰と来るかでも、かなり、やっていることというか、コンパスでの活動っていうのは変わって

くるんだなというのは感じています。

また、コンパスのどういうところが子どもや保護者に支持されていると思うかという問いかけに対し、B氏は以下のように回答した。B氏は、下記下線部(a)(b)に示すように、SNSや口コミなどを通じて、楽しそうだなと感じて来館する人も多いのではないかと考えていると述べた。

そうですね、いっぱい来館者の人に来ていただけるのは、入り口としてはやっぱり(a) なんとなく楽しそうとか、SNSで見たとか、博物館の中にこういう施設があるんだっていうのを何らかの口コミで知ったとか、入り口としては結構色々な理由があるのかなとは思います。もちろんその、博物館だから、何か、教育目的で、何か得られるのかもしれないっていうような方もいらっしゃると思うんですけど、(b) 単純に、なんとなく楽しそうだなっていう感じで来られる方もかなりいらっしゃるのではないかなという風に考えています。

(3) C氏の回答

C氏は、ワークショップに参加するリピーターについて以下のように説明した。ワークショップで作った作品を大切に自宅に飾っていて、飾る場所がなくなるくらい何度もワークショップに参加したことがあるリピーターがいること(下記下線部(a))、ワークショップでは完成しなかった作品を自宅に帰ってから仕上げている参加者がいること(下記下線部(b))を、C氏は、来館者とコミュニケーションを取る中で知ったと回答した。

リピーターの参加者の方からなんですけど、(a) ワークショップで作ったものを本当に大切に家でも保管してくれていて、ずっと飾っていて、もう飾る場所がなくなるくらい、コンパスのワークショップ、工作で作ったものを飾ってるって、教えてくれたりですとか。(中略)(b) あとはワークショップ中には上手くできない、自分が思うように作れなかったり、イメージがわからなくて絵が描けなかったりっていうお子さんもいるんですけど、改めてまた来てくれた時に、この前の作品、自宅に帰ってから一緒に仕上げましたとか、仕上げたものを持ってきて見せてくれるお子さんもいて、コンパスだけで完結するのではなくて、お家に帰って落ち着いた気持ちで取り組んで見たりとか、そういうこともできているんだなと感じています。

C氏は、コンパスで保護者が子どもの成長を発見していると、以下のように回答した。C氏は、何度もコンパスに来るうちに保護者が子どもの成長を発見すると述べた(下記下線部(a))。保護者は、子どもの興味関心やコンパスでの遊び方に変化に気づいたり(下記下線部(b))、コンパスでの子どもの集中力に驚いたりする(下記下線部(d))。それだけではなく、コンパスは、他の入室者やスタッフとのコミュニケーション(下記下線部(c))や片付け(下記下線部(e))といった生活面での子どもの成長に保護者が気づくきっかけにもなっていると、C氏は述べた。

私自身も意外だになってちょっと思ったの、意外というかすごいなと思ったのが、(a) 何度も来てるうちに、子どもの成長を保護者の方が見ていることが多くて、例えば、(b) 1回目来たときとその興味を持つものが全然違っていたりとか。自分が1回目来たときは、こうぼんやりとコンパスの中を見ているだけでも、2回目になると自分は虫が好きだからみるみるテーブルで虫をぎっしり集めてみたりですとか、あとは、コミュニケーション、親子だけでしかできなかったのが、一緒に、他にいる、(c) 他に入室者の子どもとかと声かけたりとか、スタッフに声かけたりとか、こんなの作ったよ、見て。みたいな感じで会話ができてたりですとか。そういった保護者の方が子どもの成長に気づいたり、(d) 家では、こんなに集中して絵を描いたりものを作ったりしないのにここに来るとすごく一生懸命やるんです、とか。(e) まあお片付けにしても、家では全然片付けないけど、コンパスに来ると張り切って片付けているですとか。そういった子どもの違った一面をコンパスで見えていたり、成長している子どもを見つけたりする、子どもの発見。っていうのをすごく感じているんだなってことを見かけます。

C氏は、博物館での親子のコミュニケーションについては、「どの展示、どの場所においても、親子のコミュニケーションをする仕組みがとても具現化できている」と感じていると回答した上で、次のように述べた。C氏は、コンパスが親子のコミュニケーションを促す場であると気づかない親子もいる(下記下線部(a))が、何度かコンパスに来て遊ぶうちに、展示の意図したような親子のコミュニケーションができるようになっていく姿をよく見かけたと説明した(下記下線部(b)(c))。

でも、(a) あの利用者、あの、お客さん、参加

してくれている親子によって、その展示がコミュニケーションを促す仕組みなんだってことに気づかない親子もいますし、展示を体験してもコミュニケーションに至らないっていう場面はよく見ていまして、はい。で、(b) 何度もコンパスに来ることで、ここってこういうことをするところだったんだって気づいたり、注釈を見たり、よくじっくり見ることで初めて、こういうコミュニケーションをすれば良かったんだって気づく親子も多いなと思います。あとは、(c) こちらが意図している理想的なコミュニケーションが1回目ではできてなくても、2回、3回とコンパスで遊んでいくうちに、こちらが理想としているところまで到達してくれているんだなと感ずることも多いです。

(4) D 氏の回答

D 氏は、来館した保護者の中には、子どもとコミュニケーションを取らない人がいる（下記下線部 (b)）と、以下のように回答した。D 氏は、保護者が子どもを放置する理由について、コンパスの室内が大きな公園などと比べて安全・安心だと感じるからだと言明した（下記下線部 (a)）。D 氏は、子どもを放置する保護者は減ってきたと感ずると述べた（下記下線部 (c)）

もちろん、お子さんに付き添って、これってこういう動物なんだよとか、じゃあ一緒に吊り橋を渡ってみようとか、えっと抱っこしたら見えるかなっていうコミュニケーションを取ってくれる保護者の方もいる反面、まあやっぱりどうしてもこう、(a) 何となくあの小さな空間で安心して遊ばせられる、安全に遊ばせられるっていう感覚が保護者の方もやっぱりこう大きい公園よりあると思うので、こう (b) グループでのおしゃべりが始まってしまったりとか、スマホをいじっちゃってなかなかお子さんの方にこう目を向けられないっていう保護者の方も中にはいらっしゃる。ただ、(c) 昨年度、私が来て2年目の様子を見ていると、だいたいそういう保護者の方も減ってきているなと思うので、保護者の方がきちんとコンパスが意図するところを汲み取ってくださったりとかしてる部分はすごく、こう運営していく中で出てきているんじゃないかなとも感ずています。

D 氏は、コンパスで保護者が子どもの成長を発見していると、以下のように回答した。D 氏は、子どもが初めて立った場所がコンパスだったという来館者からの話をした上で（下記下線部 (a)）、保護者は、

コンパスで、吊り橋が怖くなくなった、はしごを登れるようになった、挨拶ができるようになったというような博物館とは直接関係ない部分での成長を感ずっていると述べた（下記下線部 (b)）。

(a) 一度、お子さんとお父さん、お母さん、おばあちゃん、かな。のご家族が来たときに、おばあちゃんが私に話しかけてくれて、すごく家族にとってこのコンパスって思い出深い場所なんです、と。実はこの子が初めて立った場所がコンパスなんです。っておっしゃってくださったことがあって。(中略) あ、面白いな、そういうことが起こるんだなってすごく感銘を受けたんですけど。そういう風に、(b) 吊り橋が怖くて渡れなかったのに渡れるようになってとか、はしごに足がかけられるようになったとか、スタッフに挨拶ができるようになったとか、なんかこう一見すると、コンパスとか博物館とかって関係ないことなんですけど、親にとってはその、コンパスとか科博っていうのが子どもの成長に関わるコミュニケーションの場になってるんだっていうのを感ずる部分が結構多くて。

D 氏は、カハクのマドでは、未就学児の科学リテラシー「感ずる」と「考える」の涵養という理念があまり具現化していないと感ずたと回答し、その理由について次のように述べた。D 氏は、カハクのマドを遊具が置いてある単なる遊び場としか認識していない来館者もいるのではないかと感ずており（下記下線部 (a) (c)）、三角をつけた（下記下線部 (d)）注と説明した。遊び場としてしか認識できない親子がいることについて、D 氏は、もともと、どの程度、科学や博物館に興味を持っているのかによるのではないかと（下記下線部 (b)）と感ずていた。また、D 氏は、ワークショップに参加することでカハクのマドでの遊び方が改善されるように感ずていた（下記下線部 (e)）。

基本的にはどの展示に関しても、理念を具現化してるなあと思うんですけども、例えば細かく見てみると、(a) カハクのマドに関しては、場合によっては、保護者の方も子どもも遊び場、ただの遊具の置いてある部屋、場所っていう感覚で終わってしまうことも、見ているとあるのかなと思っていて。(b) それっていうのも、もともとコンパスに来てくれている来館者のもともと持っている科学への興味とか、博物館への興味によって、大きくその捉え方が変わってくるのではないかなあと思います。(中略) そう

いう科学への興味とか、博物館への興味っていうものが、あまりない、となると、(c) すべり台がある場所とか、そういう、吊り橋が渡れる場所とか、そういう感覚で捉える方たちも中にはいるのかなと思うと、まあちょっと (d) 三角なのかなあっている風に感じています。で、その科学への興味とか博物館の興味っていうものを、(e) ワークショップをやった後にカハクのマドに行っている様子を見ると、その扱った、ワークショップで扱ったテーマを視点にカハクのマドで動いている子どもが多くなるなっている印象はあります。

4. 考察

第3章では、保護者と子どもとの関わり方に注目して、A氏、B氏、C氏、D氏のそれぞれが捉えた来館者の姿を詳述した。第4章では、「はじめの100か月の育ちビジョン」および先行研究を参照しながら、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の場としてどのような役割を果たすことができるのかについて、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする」という観点から考察する。

(1) 安心安全な遊び場としての役割

A氏、B氏、D氏は、保護者同士で話に夢中になったり、スマートフォンをずっと見ていたりというように子どもを放置している保護者がいると指摘している。D氏は、子どもを放置している保護者がいる理由として、「何となくあの小さな空間で安心して遊ばせられる、安全に遊ばせられるっていう感覚が保護者の方もやっぱりこう大きい公園よりあると思うので」と述べている。これは、科学リテラシーの涵養を理念として掲げるコンパスにとっては課題である。その一方で、コンパスが保護者にとって安心・安全な遊び場と認識されている可能性があることを示唆している。

「はじめの100か月の育ちビジョン」は、「公園等の公共の空間では、こどもが思う存分遊びにくい状況となっている場合もある。」と指摘しており、子どもを安心して遊ばせられる環境は、子育て支援の一要素といえる。B氏が指摘するように、コンパスは英語教室の帰りに友だちと遊ぶ場所として利用されることもあり、子育て家庭が気軽に立ち寄れる場になっていると考えられる。

では、コンパスのどのような点が「安心・安全」だと受け止められているのだろうか。三村(2018)は、博物館が副次的に居場所として機能する可能性について論じ、公園のような開放的な公共空間に比べ、文化施設は人の出入りがある程度管理された空間であることから、安心利用できる空間である場として

の性質を持つと述べている。コンパスは予約制で定員制限があることや、必ず子どもと保護者と一緒に入室することがルール化されている点から、さらに安心感が高い場と捉えられている可能性がある。

また、坂田(2018)は、一部の体験型展示のでは安全面の配慮から年齢や身長制限が設けられており、その結果として低年齢の保護者の満足度が低くなるがあったと指摘している。コンパスは主な対象年齢を4歳から6歳に設定して開発されているため、幼児が自由に動き回りながら遊びと学びを体験できる空間となっており、保護者が目を離していても安心だと感じられる要素なのではないかと推察する。

D氏は、「来館者のもとと持っている科学への興味とか、博物館への興味」によって展示の捉え方が異なり、来館者によっては「保護者の方も子どもも遊び場、ただのこう遊具の置いてある部屋、場所っていう感覚で終わってしまう」のではないかと指摘している。これは、科学リテラシーの涵養を理念として掲げるコンパスにとっては、運営上の課題である。

一方で、このような来館者の存在は、科学や博物館への関心が必ずしも高くない層にとっても、コンパスが訪れやすい空間となっていることを示唆している。実際、科学技術への関心が低い層は、他の層と比較して、博物館や科学館といった社会教育施設を訪れる頻度が低い傾向があることが指摘されている(PESTI, 2016)。B氏も、教育目的で来館する人もいるとは思いますが、「単純に、なんとなく楽しそうだなっていう感じで来られる方」もいるだろうと考えていると述べている。さらに、成毛(2017)は、コンパスについて「博物館というよりも遊園地や公園と呼ぶにふさわしい空間」と評価しており、こうした評価は、コンパスが敷居の低い遊び場として認識されていることを示している。このように、コンパスが安心安全で楽しそうな遊び場として認識されることによって、科学や博物館への興味関心の度合いに関わらず、多様な子育て家庭にとってアクセス可能な支援の場になっていると考えられる。

もっとも、このようにコンパスが安心・安全な遊び場として受容されることは、来館者の裾野を広げる一方で、本来の理念である「親子のコミュニケーションの促進」や「未就学児の科学リテラシーの涵養」といった教育的意図が十分に伝わりにくくなる可能性がある。その結果として、子育て支援センター等における遊び場との違いが見えにくくなり、科学系博物館の幼児向け展示室という独自性について疑問を抱かれることも想定される。この点について、次節で改めて検討する。

(2) 保護者の成長を支援する場としての役割

「はじめの100か月の育ちビジョン」では、「こどもを育てる中で、保護者・養育者自身もこどもとともに育っていくという点が重要である」と指摘されている。それでは、科学系博物館の幼児向け展示室であるコンパスは、保護者の成長をどのように支援しているのだろうか。

コンパスは、未就学児の科学リテラシー「感じる」と「考える」の涵養、博物館体験の持ち帰り、博物館での親子のコミュニケーションという3つの理念に基づいて開発された展示室である(高橋・山口・稲垣, 2021)。そのため、子どもが遊びを通じて標本を観察したり、分類を試みたりすることができ、子育て支援センター等の一般的な遊び場とは異なる教育的機能を備えている。

そのような教育的機能を前提としながらも、第1節で述べたように、コンパスが安心安全な場として受け入れられるがゆえに、子どもを放置する保護者が見受けられるという課題がある。こうした状況に対し、コンパスではいくつかの工夫を通じて保護者の意識変容と成長の支援を図っている。

コンパスの展示は、幼児にとって魅力的な標本を選択したり、子どもと大人の視線の違いを生かして標本を配置したりすることで、自然と親子のコミュニケーションが生まれるように工夫している。また、コンパスにある大型剥製標本のいくつかには、短い会話文の展示ラベルが設置されている。この展示ラベルは、親子のコミュニケーションのきっかけとなるように開発されたもので、科学的な質問だけではなく、展示と日常生活を結びつけることを示唆するラベルもある(高橋・山口・稲垣, 2022)。

D氏は、子どもを放置する保護者が減ってきていると述べた上で、保護者の方がきちんとコンパスが意図するところを汲み取ってくれるようになったと感じていると述べている。C氏は、コンパスが親子のコミュニケーションを促す場であると気づかない親子もいるが、何度かコンパスに来て遊ぶうちに、展示の意図したような親子のコミュニケーションができるようになっていく姿をよく見かけたと説明している。

A氏は、入場前のアナウンスを改善し、コンパスが親子のコミュニケーションを促す場であること、コンパスの全ての展示は保護者も利用できることを明確に伝えるようにしたと述べている。D氏は、科学や博物館への興味が低く、コンパスを単なる遊び場としてしか認識していない親子の遊び方が、ワークショップによって変化することがあると述べている。

コンパスを当初は単なる安心・安全な遊び場として利用していた保護者であっても、スタッフの声か

けやワークショップ等を通じて展示の教育的意図に気づき、子どもとの関わり方に変化が生まれるようになる。運営スタッフは、来館を重ねるうちに親子の遊び方やコミュニケーションが変化していく様子を報告しており、こうした変化は、保護者が子どもの学びに関心を持ち、関わり方を見直していく契機となっていると考えられる。

太田(2010)は、子育て支援センターにおける遊び場の提供を、イベント型と自由遊び型に整理した上で、後者の方が継続的であり、保護者の学びや成長する力を信頼しながら支援をすることができると述べている。コンパスにおけるリピーターの姿に着目すると、コンパスもまた、自由遊び型の特性を備えた展示室として、保護者の成長や気づきを促す子育て支援の場として機能していると考えられる。

さらにコンパスでは、親子が遊びを通じて標本を観察したり分類したりするなど、科学や自然に触れる体験が意図的に設計されている。こうした展示室の環境は、子どもを遊ばせることを主目的にした子育て支援センター等の遊び場とは異なり、科学教育の視点から学びの機会を親子双方に提供しているという点で独自性がある。

(3) 保護者が子どもの成長を発見する場としての役割

「はじめの100か月の育ちビジョン」では、「こどもが過ごす空間」には、子どもの豊かな遊びや体験を保障するとともに、保護者が落ち着いて子どもと関われる環境を整えることが望まれている。コンパスの運営スタッフの回答から、保護者がコンパスの中で、子どもの様々な成長を発見していることがわかる。例えば、C氏は、保護者は、子どもの興味関心やコンパスでの遊び方に変化に気づいたり、コンパスでの子どもの集中力に驚いたりする。それだけではなく、コンパスは、他の入室者やスタッフとのコミュニケーションや片付けといった生活面での子どもの成長に保護者が気づくきっかけになっていると述べている。D氏は、保護者は、コンパスで、子どもが初めて立った、吊り橋が怖くなくなった、はしごを登れるようになった、挨拶ができるようになったというような博物館とは直接関係ない部分での成長を感じていると述べている。

保護者がこのような子どもの成長に気づくことができるのは、コンパスが、保護者にとって、落ち着いて子どもと関われる環境だからであろう。また、コンパス来館者の中には、何度も足を運ぶリピーターが一定数存在することも、B氏やC氏、D氏の発言から明らかである。C氏は、ワークショップに来るリピーターのなかに、ワークショップでは完成しなかった作品を自宅に帰ってから親子で一緒に完成させたと報告してくれた来館者がいたと回答し

ている。このように、展示室での活動が家庭に持ち帰られ、親子の継続的な学びと関係性の深まりにつながっていることがうかがえる。このエピソードは、コンパスが掲げる理念の1つである「博物館体験の持ち帰り」が実現している事例として注目される。

(4) 調査方法の限界

本研究で用いた面接調査では、子育て支援は副次的な観点であったため、子育て支援に関する質問項目が体系的に設定されていなかった。そのため、子育て支援に関する重要な意見や事実が十分に引き出しきれていない可能性があり、本研究の限界の1つである。

(5) 科学系博物館における幼児向け展示室と子育て支援の可能性

本章では、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の場として果たしうる役割について、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援」という視点から検討してきた。コンパスの事例を通して明らかになったのは、科学系博物館における幼児向け展示室が、教育普及の機能にとどまらず、子育て家庭に対する多面的な支援を提供できる可能性である。

まず、第1節で述べたように、コンパスが保護者にとって「安心・安全な遊び場」として受け入れられていることは、「未就学児の科学リテラシーの涵養」や「博物館での親子のコミュニケーション」という理念から見れば課題である側面も含んでいるが、その一方で、科学や博物館に対する関心が必ずしも高くない層にとってもアクセス可能な開かれた空間となっている点は、子育て支援の場としての大きな意義を持つ。とりわけ、子どもが思う存分遊べる公共空間が減ってきている中で、コンパスが提供する安心感や安全性は、子育て家庭にとって魅力的な資源となっている。

加えて、第2節および第3節で示したように、来館を重ねる中で保護者が展示の意図に気づき、子どもとの関わり方が変化していく過程は、子どもとともに育つ存在としての保護者の成長を示すものであり、科学教育と子育て支援の接点を提示している。コンパスにおいては、子どもが遊びながら標本を観察したり、分類を試みたりすることで、科学や自然に触れる工夫が随所に凝らされており、こうした体験は、未就学児の科学リテラシーの涵養という展示室の理念に深く関係している。親子で標本に目を向ける機会を持つことは、保護者が子どもの「学び」を支える存在としての役割を自覚し直す契機ともなり得る。

さらに、科学や博物館への関心が高くない保護者が、子どもとともに繰り返し来館することで、科学や自然に触れる機会を持つことは、科学低関心層へ

のアプローチとしても大きな意義を持つ。科学リテラシーの涵養を理念とする科学系博物館にとって、このように展示室を通じて新たな層にリーチできることは、博物館の社会的役割を拡張する可能性を示している。

このように、科学系博物館における幼児向け展示室は、安心安全な遊び場としての性格を持ちつつ、保護者の成長や子どもの科学的興味・関心の芽生えを支援するなど、複合的な役割を担っている可能性がある。科学教育と子育て支援という複数の観点が交差する場として、こうした展示室は、今後の科学系博物館のあり方を考える上で、一定の示唆を与えるものといえる。

5. 終わりに

本研究では、コンパスを事例に、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の視点から展示室がどのような役割を果たし得るのか、それが子育て世代と博物館の双方にもたらす可能性について検討した。本稿では、コンパスの運営スタッフへの面接調査の結果をもとに、科学系博物館の幼児向け展示室が、子育て支援の場としてどのような役割を果たすことができるのかについて、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする」という観点から考察した。

その結果、子どもにとって安心して遊べる場であると同時に、保護者の成長や気づきを促し、子どもの科学的リテラシーを涵養する場として、多面的に機能していることが明らかとなった。また、科学や博物館への関心が高くない層にとっても利用しやすい環境となっており、科学リテラシーの涵養を理念とする科学系博物館にとって、新たな来館者層へのアプローチという意義も見出された。

本稿では、運営スタッフへの面接調査をもとに、スタッフが捉えた来館者の姿から考察を行ったが、これらはあくまでそれぞれの運営スタッフの一意見に過ぎない。今後、科学系博物館の幼児向け展示室が子育て支援の場としてどのような可能性があるのかについて、来館者の行動観察や会話分析などの客観的な調査を行う必要がある。

附記

本研究の一部は、JSPS 科研費 22J12376 の助成を受けたものである。また、本研究の一部は「上廣倫理財団・教育研究活動助成」の支援を受けたものである。

謝辞

面接調査にご協力いただいた国立科学博物館の関係者のみなさまに、心より感謝申し上げます。

注

事前に送付した質問事項の「(3) コンパスの展示が理念を具現化していると感じたのかどうかについて」の中に、コンパスの展示のうち、「コンパスを運営するなかで、それぞれの理念をよく具現化していると感じる展示は○、あまり具現化していないと感じる展示は△、と教えてください。」という質問があった。

引用文献

- 文化庁 (2023)「博物館法の一部を改正する法律の概要」, Retrieved from https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/kankei_horei/pdf/93697301_01.pdf (accessed 2025.09.04)
- 古川裕美 (2018)「未就学児を対象とした展示エリア【たん Q ひろば】」『博物館研究』53 巻, 9 号, 20-21.
- 萩原久美子 (2008)「『子育て支援』のメインストリーム化」汐見稔幸・佐藤博樹・大日向雅美・小宮信夫・山縣文治監修『子育て支援の潮流と課題』pp18-42, ぎょうせい.
- こども家庭庁 (2023)「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」, Retrieved from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/6e941788-9609-4ba2-8242-42f004f9599e/64c1f5ab/20230928_policies_kodomo_sodachi_07.pdf (accessed 2025.09.04)
- こども基本法 (令和四年法律第七十七号) .
- 子ども・子育て支援法 (平成二十四年法律第六十五号) .
- 三村麻子 (2018)「都市型の科学系博物館における幼児を対象にした取り組み：福岡市博物館の事例」『博物館研究』53 巻, 9 号, 18-19.
- 文部科学省 (2008)「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～ (答申)」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_/_icsFiles/afieldfile/2008/12/18/080219_01.pdf (accessed 2025.09.04).
- 成毛眞 (2017)『国立科学博物館のひみつ地球館探検編』ブックマン社.
- 小川達也 (2018)「博物館における親子のコミュニケーションを通じた未就学児の科学リテラシーの涵養について」『博物館研究』53 巻, 9 号, 10-13.
- 小川義和 (2023)「ICOM の博物館定義の見直しと博物館の新たな役割」『日本科学教育学会第 47 回年会論文集』57-58.
- 太田光洋 (2010)「地域子育て支援の実践からみる支援活動の意義と課題」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』1 号, 1-11.
- PESTI (2016)：科学技術イノベーション政策に関する世論調査報告書, Retrieved from <https://www.nistep.go.jp/research/scisip/data-and-information-infrastructure/pesti-data> (accessed 2025.07.07) .
- 五月女草子 (2018)「自然と博物館にふれる最初の一步～自然博物館における乳幼児向け催し「おはなし会」の紹介～」『Musa 博物館学芸員課程年報』32 号, 21-25.
- 坂田尚子 (2018)「科学館における幼い子どもとその保護者のための体験型科学教育プログラム開発に関する研究」『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』8 巻 1 号, 30-36.
- 岳川有紀子 (2018)「科学館における幼児期の科学教育の実践的研究 ―幼児のための企画展『にじのせかい』企画立案から実践まで―」『大阪市立科学館研究報告』28 号, 19-28.
- 国立科学博物館 (n.d.)「親と子のたんけんひろばコンパス」, Retrieved from <https://www.kahaku.go.jp/learning/compass/index.php> (accessed 2025.09.04)
- 高橋あおい (2023)「国立科学博物館の展示室『親と子のたんけんひろばコンパス』の理念を運営スタッフはどのように捉えていたのか」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』17 巻, 1 号, 63-71.
- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2021)「国立科学博物館の展示室『親と子のたんけんひろばコンパス』の理念」『科学教育研究』45 巻, 1 号, 57-75.
- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2022)「国立科学博物館の展示室『親と子のたんけんひろばコンパス』の理念はどのように反映されたのか」『科学教育研究』46 巻, 4 号, 384-396.
- 大豆生田啓友 (2008)「子育て支援とは何か：子育て支援の多様性」大豆生田啓友・太田光洋・森本史朗編『よくわかる子育て支援・家庭援助論』pp2-3, ミネルヴァ書房.